籬乃梅

三編上

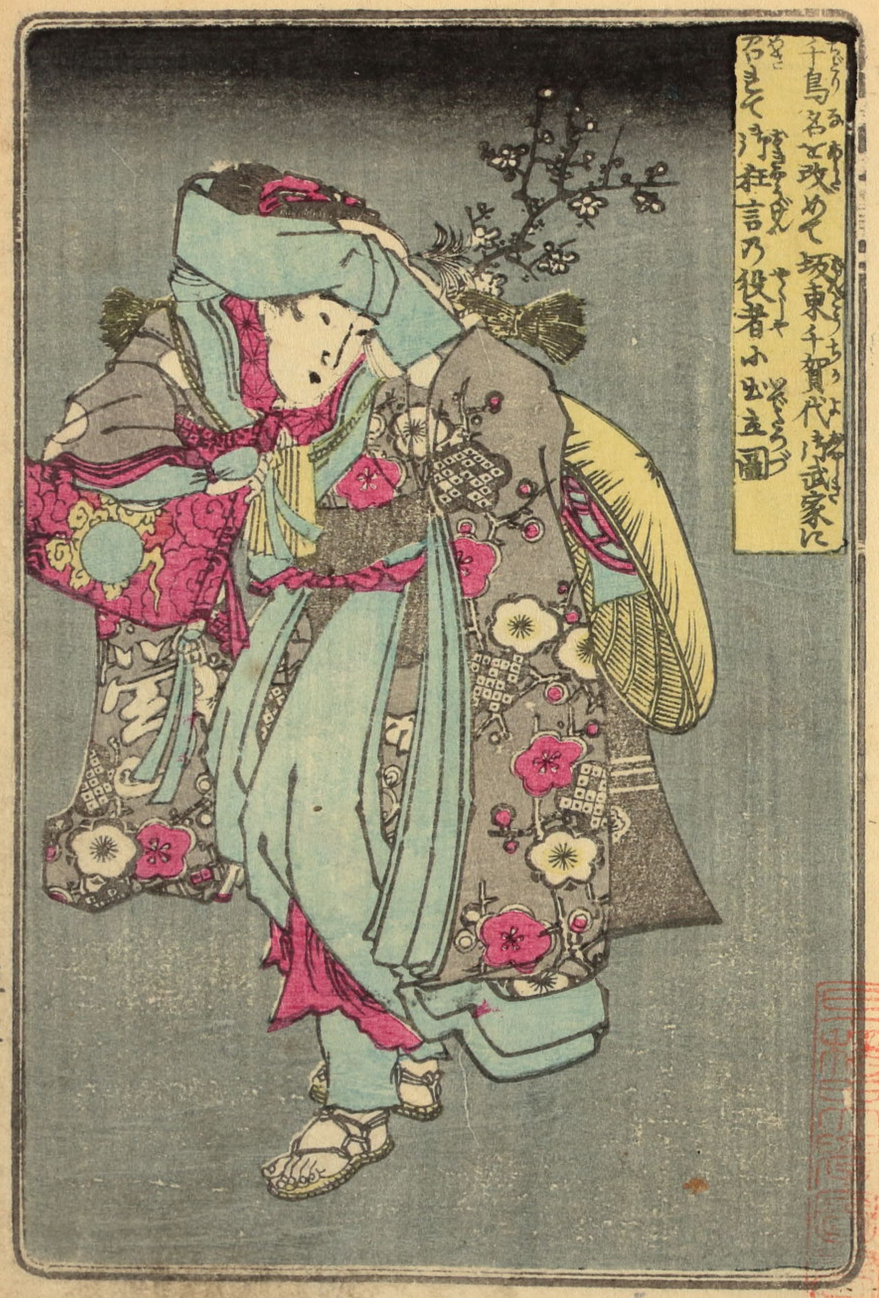
へ13
2919
7

門へ13
2919
7

昭和九年
七月十八日
購求

竹籬梅第三編の序

精神明潔思光邪妙霞何須竹籬
月華萬紫千紅塗[illegible]出哉生
仮得到蕚[illegible]鄭大東子が
梅の賞翫せしも梅花の清香と
そ[illegible]花形の可愛を愛する人の正平が
世[illegible]人の孝貞の物[illegible]追こゝ平



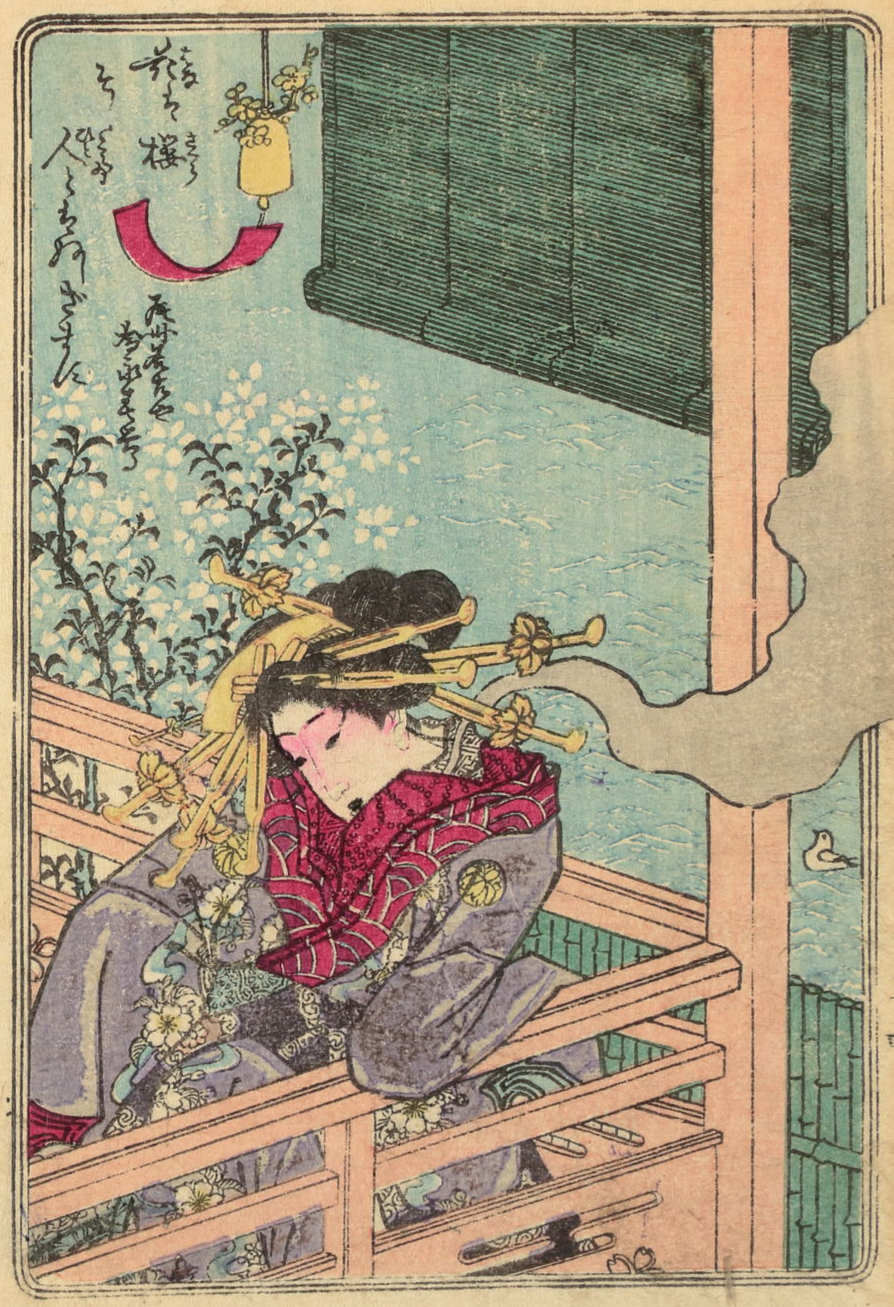
しの秋のよるを鶯のおもを野畠の雪
何ぞ枯るるぬ花の枝好文木とつふ名を
加賀国にふるあやめ梅のお顔の愛
その数百種の猫の千金の
價ふ[illegible]

天保十己亥春如月

為[illegible]の奥[illegible]連

日本けりの

完齋誌



春色籬の梅巻之七

江戸　爲永春水著

第十三回

金龍山の鐘の声八扶寺の鉦ハ郷賛会高瀬船の櫂の音八河岸よりの枕木の青竹と倶ニあづりハ園人青葉深しく吹入るゝ風八彩端の鈴をゆるゝ遠近ハ俳諧家賛席の料理も所ゝ種ハ開てゆ豆腐八ゆるゝ酒屋八隣家賛席の料理も所ゝ種ハ椅子ゆる自手ゝ豊ゆ四季ゆの景春の花ようゝ優く郊の

花の垣遅櫻まゝと牡丹花も咎みぬそを人詠めぬ俗ぬ
一樣ハ彼落雲の父なりける安中の豊三郎ぶ彩筆使ふ
田舍ゝう登りゝ時の和右火難を除る雅ヶの寮風雅と
活業の西ゝ酒落ゝ但ハ奥ゝ倒ゝ此度ハ
久ゝ山地ゝ遠留ゝ娘の為親を寮づつ保養のゝ種の
藝者を招き御をする人を呼寄親を慰ゝ貴ゝ
南ゝ賛ぐゝ常の慈類ハ當時まれゝ野暮ぐゝ
浮ハ芝淋ゝけを同ゝ彩並の別荘ゝ遊ゝ園ゝ浮風ハ

貴ゝ女房を遠ゝさせて島雅の家ゝ遠入ゝ大者
ハ鏡臭の ゝ次ゝ女郎ゝ今の ゝ身の
バナゝ嬢人ゝ頼ゝて言ゝ せんゝ遠ゝ動ゝの
ゝる その 月ゝ親ゝと ゝて ゝる 床ゝ夫ゝの浮留
理 嘉ゝ 暮の 稼 身につ ゝて ゝ島雅の
夏を男ゝ 礼まて 涙ゝ せび 居ゝ ゝしゝ 代ゝの間ゝハ
浮雲の父 俳名嘉悦 彰間の 櫻川 新吾と 先刻ゝ
行ゝ ゝて ゝて居る 赤ゝトキニ 理屈を ゝで 唯

まけもの〳〵娘を養子とぞろりの〳〵一條〳〵もろ弟八伯
母様の貢献がありのうち　新八　五左衛門　他人　雑考へもぎろ
ませんが手伝ひでも内外ともみ赤さんハ内存ドうひ
つもりが宜しうどざろ　左様して　島雅さんの
方も娘位の方も私が養新ぞ　左様ク
渡見でまるけ桑が世話の人ホ笑ひまる様ア
行様ぜ　新八　至十二月様ひまして　様ひまとハ　没てい
ませんが幸　娘位さんの内福親が枝おうん　ゆきまば

誓書ふあらで　殿委の信一左文も不及　評判八銀蔵の
花の嫁家寿ゲ好まれうる。まへうの場所ゆ美味
ゆきげうう
あらよ様ハ　ゆげげね　たちんど　ざんぞ　ゆうう　ゆ　ゆ
花の顔　蔵の甚ぞうよ　せうけてゆきまて　ゆの　うて
大将　ぞうぞ〳〵　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ぞやと方桑〳〵　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
八傍見廻〳〵　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

別宅の時見世棚と思ひ一所に成蔵とやらん軍法ハいろ
はべらうねと考へを聞と持病の山嵐
ひたすらハ苦の雲ゞ福の茶よりもよく〳〵と島雅の変成思ひ
霧の美よりもとも逢さを保ふ多〳〵ハ浮世の義理
多女中むり〳〵の身多うれバ島雅ハ女房が在うへ多う妾
とうりも落〳〵うぶと物まと膳多の出来う福のも枕ハ
知らまてこ父の和本妻多うバ言成ってて縁付て生ゝ左根
佐やと言うまて裸まバ考程多うれどさをゞハ男の狐達が

さまゞが才一ぐを思〳〵当て何の変も當分あるハ成成ずハ
私ハ和住世成て成下さ〳〵ちてお茶さんも出一氣保養ハ
おうけ多うあとお鼻の毒でどうねうたゞ和へ左根
サ〳〵毒〳〵老込で何人出るける元氣も福人が今ッ
う堀の延津賀を さそうそ お茶と三人でハ梅の汁形へ
ずハ佐へハ新〳〵イ さまハ有ぐうへどうねまた変うまと
何ぞ能 樽鼻ゞ出来さそう 和〳〵汁形根で浅草多ッ
左根ハ言ゞ〳〵延津賀成連て行バ見形一軒やらぐハ

稲戸乃
別荘
新孝

うるめ人そなたへつぐ お薬ホ 子ぐもの きさの 鼠て見張ト
浅草の方へ急を出し お薬や おらア 新孝さんと 法蔵人
いろて来るヨ 淋しい 仁立宜ざる 長ヨそなたでゴザ子 新孝
さんを用ゲありまして 帰るふ 山所へ 考張を 春張
そなたやア 左張 言へ お三ホ 迎所の 児女でも 呼ホ 嘗りて
柱んで 黄ひを アイト 返を あるゴざるうるみ〜 琴と
眼ようるめ〜 涙を 父ホ さるゴざるを 鳥飛をひけて 見送
らば 寄ゴ ゴざるも 郷親 何ゴ 出て行 法ふ ゴざる

淋しく おさんがやとして 居うけ 嘗ハ 薬を 寝ドあげ
ろて 勝ゴ ようして 持ち 金 お薬 できる 何ク
考へて お 贅氣 成 ふ チョイト お 遊の 方ろ 嘗 でも れど
寛ドき 町内の方も 今日ハ 大 ホ 関女流や 何ゴ 通り
ます ヨ ヲヤ 左張 何 所で 論る 所でも ろ 金 ん で
ぶるます ヲヤ ホンニ 貴 嬢ホ 左張 やきふ とぶんドてツイ
ます ます 先刻 ホ 後ホ 来 て 稲ア 橋の 陰で お客
と 述 戯を ます る 関女流を 貴 ます 〜 ゴザ子 立流を 義

藤女でござゐ　まうしうは仰でも婦美川の風ゐ遠ひござゐ
まうせんがようく見まうう　甚興女流の眼鼻立の貴
嬢ゐ似くるの　ゑんのと　松ハ　ちどゐ百一　まう嬢うとぞんじ
まうしうョ　金ゝ　久しのものゞョ金女ゞ作山る　まうでゐう似
人ハ　歳人　あるハナ　金イ立　似さんうゐぞハ　ゐ在ません
まうゝ　並べて見ゆうう仰ゞ　まう嬢ゞう　知まうひと
存じ　まうョ　ゐうも　まう時ゐ若行の　義さんゞ　拝んでゐま
年　歳て　まう興女流の　変成　和奇町の　小濱さんと　言のゞと

私ゐ教へて　ゐ呉ゐまさゐます　ゝト　聞て　仰ゐ　おどろく　浦雲
太須　島雅の　さゐ　ゐハ　一度　婦美川を　引込せ　ま後
沙濤の　知まゝと　聞　その　小濱　まゐ　あるやうん　さゐも
あるゐうバ　我類ゝ　似ゐ　ゐ　仰まゐ　ゐうゝ　ひく
そまゝ　であるゐうバ　島雅との　中ハ　仰ゐうせ　聞　捨られ
苦労ゞとまゐ　物を　痛ゐ　つ　そ　て　お客ハ　仰ゐ
人ゝゞ　ッけェ　三ゝ　お客ハ　お侍さゐゞ　二人と　お医者さゐらハ
坊さんゞ　お連ゞ　ござゐ　まゐ　ゝト　ゝ入　所へ　飯焚男の　権

助ぶ次の間まで来り　権へ「おこどんお客ごぜうまし
うちちろと来て　三へヲヤ　左根久ト傍目の方
へ色々ぶつぶつ　三へアノウ　浮雲の弟へ来り
十八九ばかりの美麗人品の婦女中ら内くで生れ張ふ
即ふうを改と云て　お待歳でお生歳まさぐ伺根
いとし生う　三へヨシ〳〵　誰ごのう　各きお関ゐ伺人で
ぎろまさと左根いろて　三へアノ　うつう島雅さゐとやら
うらと云ましこトの八まて　胸にギックリ　と案じ戌くさ

祈る花雲のいろ〳〵うきうんと考へ〳〵　逢べ根よの解
べ〳〵　折角来ましこ由根の人を待ぶも悪うろうんと
思案して　「子是ぢやア子左根いろて　おまゐ嬉で
成成ぶ　ぶまぶ　居まさぐ　ごぎ〳〵　お伺　成まし　言ふ
お目ふうろうまひでべ伺ごう　お思ひでぐるませうう
お見うへかうまさぐ　乱して居まさうう　出見成て
伺根ぐ此方へお通んうきうて　行下まして　左根いろ
ちて　あまでも余りぐろうあちらの部屋若でべひ

ぎん
不新着の襟をんのを云て
でぎるまでは　「ナ」二帯へ　さびと宜ヨト
着類を着る人る　梅の花よ　陸ぐらもくの如
きの身へ　苦痛を堪へて　久不　紅涙を
付て　梅付る　髪へ　ふ　ふうき
顔へ　ちうて　百さ　殺　ふうき
櫻　さうせ　梅の　を　流　風情　実　ふ　柳の枝へ
吟　月の　へ　さぞ　と　思　ふ

さても　さが　家内に　美人　通　あと　ふ　ちが　逢　扶
務　へ　誰　ぞ　見　け　巻中　へ　家　初　さ　こ
者　あ　ぎ　鳥雅の家の　ち　居　鶯
ち　民　と　娘　て　鳥雅　が　湾雲の許　ふ　通
時　へ　男　も　対　も　甘　て　ぢ　奥
當時　流　内　さん　小濱　と　者　湾雲
二の町　へ　梅里　大家　里　成　の

おぢと聞くゝ發明の婦人ゝ姉ととお元の肩を持て屋鰐を付ゝ中に島雅でさへも お元を兼略ハ為さぬ姉女もこれを悪しゝて姉と思ひぬ実の娘と異なる事なくば内外の者も疑ひて多くゝ興女あぐりうゝ云ひこぢつけの内義なんでと蔭でもそゝ言ふる類ふあゝで自然と蒲ゝる威ふる風俗さまでとも色の生涯へ柔和ぶ常の戈智ふの勝ゝぶこと見へおける

第十四回

再説もお繁とお元の両女ハ手ホ義理の挨拶も済て式ウ
初ハ今日は新く糸を生しこの八島雅様へいつまおそぶぶ
内外の者ふも隠して知ゝのでどぎふ生ぶ為さんが
市郎氣でおぢきろ八伊様も当夏のおたふ戦いこゝ
生ぶのゝ市面例でぶ為ぶ産生きう祝ゝ八十二他の
夏でハ為ぶ生ぶ宮あて島雅さんの夏でお知ふろて
のでぶ産生きう伊幸マア鮮代出してくん
成まゝナ左様ふバ私の思い付生ゝ夏を

中て視ませうぢアノお孫さんのお心中で私が島雅さん
の内のお内室さん風俗て居ますぢもお思ひでおざる
ますとお咄しぐいさー思ひぐきるまたろう江戸通 私成
侍女のお民さと思ーたて行下ーヨ ヨヤ お孫さんハ
表向立れるお里ぐあ内て島雅さんの所へ出向室さん
ホ成ホお玉のぢやア あつたゑ せんうそーて他人の噂でお聞
中ーたら 島雅さんの祖母さんと母さんぐ大相ようなる
さんを為毛ぐんておそざとゆふ変てぐざるまたのおえの

侍女ー見ゆて是ろと人の報ーと江解で出来た人
ト聞まて出来人迎ホホ主ー弟の変より写もく
島雅ホ別まて安房の国人さ千ー人て雅毛せーと
ますまてう鼻紙活まて喧嘩ー変ーたう 主ー浪島雅ガ動
当市ー上方ーろ帰ーて再會ーおりひきせろ情の
ウき振ー人 只自分の縁対 ひやーーうぐざる変と話
要ホ義和 せーろて言まー入ー作者の筆に尽ーぐー
ようーーーーー変人りつも其ー中ホ中ーく

はうかう〳〵と支のこゝを多く聞せ〳〵やがて清盛公今
八ぢ前を幾所隅ゝ会八 晴て雅が身の上も他
月ハ視て暮ゆくの支八多く修ふあるねが清盛
の常を発明まるる温顔けり
〳〵左様であり〳〵人私八ものと兵一通りで苦労
も有るも歳で〳〵島雅さんの内宮さんハ多ん
〳〵このうと思のてだろう居〳〵このふそとで八 〳〵
寔ハ夏の月ハ出逢の支ぶ支うくこの人ハ〳〵の

中ハ家の奥様さこらく人ハ叔の萬子るとお三ヶ持
出てお客八こをお花ハ進め答数多ぐく「アノそこ
で八〳〵お帰えんの身の上の支八こうこまるこるる私の
身も鳥雅さんとの中の多八兵一通りの客人で居
落くるまでいくこけでも〳〵家内ハ居〳〵時分
お客の顔まれて出さ帰ふえでおて月あこるこて
を時らうの縁であります竟深く苦労もして
此船と頼ひも法華のざるにうの幸推量して呉

成まして蒼空をそなたと眺ひるゆゑ〜トお若人対して
ふ鄙らし〜く情まげるし言葉なぐら恨まて空の雲
情義ハ高人のおもむきとゆ〜遠ひ〜名ちと赤〜
る〜ひ〜雲ハ涙を膝の上にハラ〜と落してそん
様子ハ苦労を成してもお姉様の様子を支柳ふるう目をと
その中聖文ありまをけまをども今の私の身の程をクイ
ちてハ慈悲ら〜まる筆親さんみまて義理と遠ちう
来イして自由ハ通りませんヨるるらば情ひとお思ひてるく

成をる支ちを支ふしてお若人成キ〜ヨト鼻紙みて涙を
拭て目のふちを赤くせ〜うひら〜さ島雅ガ去ル迷
ちも世ちをと思ハ是ける「ホシニ」お嬢さんもおいと
ちハ様ハ島雅様の支てハ苦労を成ましハ様ト生
身もるる〜憂幸労を思ひ出して涙ぐ〜「アノウ
ちん様ハ思ひてお至のを幸ひ〜私ハ御ひがありまをガ
お嬢さん聞とけて先下まをハ「ヨヤちんさるなちら私の
様ら者ハ頑ひうんぞく町寧ゑお言でもそを様の様ガ

存身でありぬせんヨそをざるべけまども什振て信切
ふ尋ねて来て異議まして乗の身の上紙も明し合と
中ふあうイしこうこうへおし人妻仕るを変ても関入まるを
けまべ海ませんゲ仕のゲ子そるを言て関うして異る
まし十ナ子二子他の変てもあるるをせんが什る中こう
鳥雅さんゲ一日でも家内に落ちて お主のこるへあうま
せべ お祖母さんゲ毎日 お嫁ー 成て什振もるのこと
仍状をまるるのゲまゲ別家して同る中 隠居ーこ身で

ありるのゲこう 鳥雅母ゲ こへ親類中ふ將まるまて親兄弟ゲ
鳥雅を世話の什振ゲ悪ゲこう 吹ゲ身分の笠るるのゲ
知来るひのゲ家紙持して身を こまるまべ什も勘當
さるるひゲの真実 什振 振るるでへるひ什隠居ゲ
世話をして他人こ雅非をひまるひ振こして視せるを
こ流ふ言張て 居を知ぎこしこ甲斐もるく奉公人住ふ
たこうして変て海りのこ什度鳥雅ゲ悪所通ひをこう
他所こ居候をして居こまこゲ 親類や出居人関へて彼

是と時様さまる日に八老婆の此身まで面目を失ふ
丈ぶるる生て居るのも孫のお教で老入を悪く
するものも我人もあるが現在親と兄が見限ることの
孫を有をもつて今更思へば海道をお老年に八似
合ぶふつれぐさだけと祖母さんの小言を左程のを聞て
見まねと私が野蒔み身で島雅さんが家内ふ入りで
生成孫と出来るのぞと思へ思へと宅ふ母様さんの
思ふくも祖母さんの心苦労も身一ツふ縋つて親の毒で

あるせんろう種こと考へ出すも減多ふ異見がましい言葉
やうこと様お氣ふ障ることなく居所へ引る新孝さん
ぶふ出でおまへさんのお時代風手ーこと今月限りて出て来
ーこのぞざるまたヨト言葉風つ不審兼知ることて
手ぶ無ふ　ヨく　そ丈でハ新孝さんが　おやさん丈島雅さんが
此家へでも来て親の振ふ言葉ーこのこと　イエ私様して
左程でハぞざる　ませんよ島雅さん八久しふ仕様ふ情合の
あること少濃さんとまる深くお成義て此濃でハ押通しふ和

歌町の小濱さん所へだろうつまれてお生のでなくなりましたヨト
のハなしてさてハと為雲ゞ男ひ出し　先刻の客と鶴ハ
向ひへ越さる奥女ハいよ〳〵小濱ハ身を鳥雅よ憑ハ
あハそなたハ何さまの発ア　若路小濱の為ハ為猶ひもし
たりを聞し　鳥雅のハ為ハ花と此身ハ出ひ捨しも屋ハ
あるゝと推量せしゞ　向ひ　「ヨヤ〳〵ア　
知ハ叫して聞せるひ　ハもおしも知ハるのでひりまして
何招してきと久しく何為の知ひ小濱さんゞ何所

ハ出てきのであつて　ませうれ　ちしてアノ自分の
方へだろう引分て　ハも本宅へ帰し中さるひとハあんまり
おしゞ能　「そなたでだるる　まだハハ来てもハの
為情だるあで　鳥雅さんの見ハ　ハ為ハ出ハ　
ハ何幸　お為さんハ　お願ひ中て本宅へ落ちてお生ハ成
招しして業ひ中変だるあ　まだヨ左程して　ハ下ました
「ヨヤ〳〵何招しして　ハ出ハ　あのハ　お為さんの
招ハハひらしハお内宅さんの身落でさん何ひ鳥雅

さんを行儀して私が見捨てゝまこと身のよう
左
なでハこざりません 島雅さんもお糸さんをハ哀しひと思
ひて おまへ遠ひこざりません けれども 仮糸と遠所て
當時てハ お糸さんの 爺さんが 同居ハ お金義てゝ
ゝ 嘆のくらしハ おぬしハ なりて きまりそもが 窮屈で
此方へ お逢ハ お出でなへのでこざ おまへヨお前さんが私の
ゝ 通ふして 来ると 見非とも 島雅さんの 紙
家内へ 止る 様ハ出来ぬ 遠ひこざりません ヨそまでこ

ゝ 行幸 私の 中通りハ 歩成て 来ます ナ なへこざ 行儀 ゝ
まこと 島雅さんが 本宅ハ おまへの 様ハ 出来ぬ ゝ
なる アノウ 鳥でこざる こざが お糸さんをハ 私の 妹こざ
縁者ごとゝ やて 行でも スしく 源て おまへの が 山 田の 方
へ 行通ひを する 様ハ 出来ぬ こざ 呼で 遠所を
きま 変こざる まこと とゝハ 祖母 きんハ 私を 養毛ゞて 私の
言通ハ ハ 出来こざ まつ ゝ ふして お糸
きんを 私の 妻へ 入て 西 ゝ と 母 きんハ 不 郎 宗 縁

ぢやう〳〵雖人も遠く夜分者ハ他ふ分ひ宅でぐるまを
ヨイの程ぞ左程して お茶さんが まて お主義て行下さると
仰ゝ二人で歌うして 島雅さん江外へ出さ分ひ 仕
まゝ うら見ぬ お出でも 左程 義て行下 まゝ ヨト 兄が
頼ゝ八 清雲が 鼻に 来ての 夏ぐら 涼と 稽こ
ちく の八ぢ 底の 義理と 意地 ぢぐらく 思案をして居さ
ぢけ あられるうや 切花 切桑の 心あむ人 ぢを 味ひなく と
春色籬の梅巻之七了